生まれ変わる

ひなた工房双葉開業記念企画

ひなた短編文学賞

受賞作品集

ひなた工房双葉開業記念企画

ひなた短編文学賞

受賞作品集

テーマ｜「生まれ変わる」

主催者挨拶

フレックスジャパン株式会社
代表取締役社長 矢島 隆生

2020年9月、双葉町に初めて降り立ちました。東日本大震災から10年近くの時を経ていながら倒壊したままの建物が並ぶ町に胸が塞がりました。同時にこれから復興し更に新しい創生も興る町だとのイメージが降りてきました。そこで私たちはこの地に衣料品をリメイクする「ひなた工房双葉」を設立することに決めました。テーマは使われた衣料品に纏わる思い出の再生です。今夏その工房の開業記念として「生まれ変わる」を題目に「ひなた短編文学賞」を開催したところ、817篇の作品が集まりました。多くの作品には作者の思い出や今を生きる中での思いが溢れていました。ある作者にとっては哀しみを癒すものだったかもしれません。ある作者にとっては自分へのエールだったかもしれません。AIがどれ程進化しようとも自分自身で創作し書くことが人間に取って如何に価値あることかを感じることのできる文学賞となりました。ご投稿くださった全ての皆様にお礼申し上げます。

一般社団法人日本メンズファッション協会
理事長 八木原 保

一般社団法人日本メンズファッション協会は感動創造を理念とし社会貢献を根幹に据えて全ての事業に取り組んでいます。その一環としてあしなが育英会様や災害被災地へのチャリティー寄附などを行っていますが新たに福島第一原発のある福島県双葉町由来である「ひなた短編文学賞」を共催しました。
一日も早い復興を願い引き続き被災地域の応援をしてまいります。

ご挨拶

フレックスジャパン株式会社
代表取締役社長 矢島 隆生

一般社団法人日本メンズファッション協会
理事長 八木原 保

選考委員長
小説家 塚田 浩司

選考委員
双葉町長 伊澤 史朗

選考委員
Web Novel Labo 運営者 蜂賀 三月

選考委員
双葉町長 伊澤 史朗

まずは、「ひなた短編文学賞」に応募いただいた多くの執筆者の方々ならびに、文学賞開催に関わったすべての方々に厚く御礼申し上げます。「生まれ変わる」をテーマにした作品が数多く集まり、私自身も審査員の一人として応募作品を読ませていただきましたが、切なさに涙するもの、資源循環を示唆するもの、感謝の念が込められたもの、様々な切り口での「生まれ変わる」を感じました。双葉町は、東日本大震災と原子力発電所事故により甚大な被害を受けた町です。2022年8月30日の一部避難指示解除により、震災から約11年5か月ぶりにようやく人が住めるようなり、まさに双葉町は復興して、生まれ変わろうとする途上にあります。今回の「ひなた短編文学賞」をきっかけに、一人でも多くの方に双葉町に関心を持ってもらい、生まれ変わる双葉町の姿を見ていただきたいと思います。

選考委員
Web Novel Labo 運営者 蜂賀 三月

今回、この素晴らしい文学賞に携わり、大変貴重な経験をさせていただきました。文学賞を創設するにあたって、私自身応募者に近い立場で『ひなた短編文学賞』と向き合ってきたように思います。 応募者の立場からすると「生まれ変わる」というテーマを、約1,000文字で表現することはものすごく難しいはずです。生と死を連想させるこの言葉は、センシティブな内容になりやすい側面があります。また、物語によっては、他人に触れさせたくない内面的な部分を表現することにもなるでしょう。このテーマのなかで、表現や物語の着地点に迷った方も多いのではないでしょうか。応募いただいた817作品はどれも「生まれ変わる」というテーマに込められた想いに寄り添ってくれていました。それぞれの「生まれ変わる」物語が、キラキラと輝いているようでした。それゆえに、選考は大変難しかったです。応募作品のなかにはフィクションはもちろん、セミフィクション、そしてノンフィクションの作品もあったように思います。それほどまでにリアリティを感じさせる体験・ショートストーリーがありました。ショートショートとしての面白み・テーマとのマッチング・メッセージ性はどうか、文章やアイディアはどうか、選考に関わる全ての人間が様々な視点から作品と向き合いました。ぜひ、その物語たちに触れていただけると嬉しいです。たくさんの素晴らしい作品を、ありがとうございました。

選考委員長
小説家 塚田 浩司

受賞された皆様この度はおめでとうございます。また、応募していただいた皆様、ご助力いただいた関係者の皆様には心より感謝いたします。まさか817作品も集まるとは思っていなかったので下読みはかなりしんどかったです（笑）しかしその分素晴らしい作品を選出できたと思っています。
大賞作品には「可愛がって下さい」を選ばさせていただきました。こちらの作品は斬新なアイデアが際立つ、純粋に楽しい作品でした。しかし、それだけにとどまらず、双葉町やひなた工房のテーマである「再生」をうまく取り入れています。奇妙な設定にもかかわらずラストには感動してしまいました。本当に素晴らしい作品です。おめでとうございます。
「掌に我が子」は大賞作品と並び強く推した作品でした。今回、リメイクを扱った作品がたくさん集まりましたが多くの作品に共通したのは故人への想いでした。しかしこちらの作品は生まれたばかりの我が子に対する父親目線の物語です。明るい未来が見えるような前向きな作品でした。赤ちゃんの服をリメイクするというアイデアに魅力を感じ、こちらの作品は佳作とアイデア賞とのダブル受賞となりました。おめでとうございます。
「ダディベア」はエンタメ作品として純粋に面白かったです。ショートショートとは思えないほどの展開力に驚かされました。
「太陽」は佳作とティーンズ賞のダブル受賞です。ビーチボールに吹き込まれた彼の息が抜けていく描写に、切なくなりました。女性が前を向こうとする素晴らしい作品でした。
「太陽の粒」こちらも佳作とティーンズ賞のダブル受賞です。失恋の痛みと、彼からもらった思い出の品をリカちゃん人形に背負ってもらうという発想が面白かったです。
「波に揺られて、」悲しい物語ではあるのですが、前向きなメッセージがよかったです。特に「あなたたちにも今を生きてほしい」というセリフが胸に響きました。
上記以外の受賞作品や受賞作品以外にも素敵な作品はたくさんありました。応募者のみなさまがテーマと向き合い、双葉町やひなた工房の想いに寄り添って執筆してくださったことがとても嬉しく、たくさん感動させていただきたした。また、私自身小説を書く身としてとても刺激になりました。ありがとうございました。

目次

大賞

可愛がって下さい……田原にか 10

双葉町長賞

愛を紡ぐ細胞……蒼月友 12

MFU賞

焦げ跡……彼方ひらく 14

準大賞

Reincarnation……流灯祭 16

逆メタモルフォーゼ……辻内みさと 18

佳作

父のサムシングブルー……寿すばる 20

掌に我が子……千葉紫月 22

太陽……立花伊織 24

太陽の粒……相川朱里 26

散歩……春野息吹 28

ダディベア……望月滋斗 30

波に揺られて、……吉田六 32

アイデア賞

掌に我が子……千葉紫月 22

母の形見……結城刹那 34

虎の支え……明日香 36

ティーンズ賞

ひかり……猫戸寧 38

祖母の家……相原梨彩 40

向日葵と走る……昼川伊澄 42

太陽……立花伊織 24

太陽の粒……相川朱里 26

テーマ『生まれ変わる』について

福島県双葉町は東日本大震災及び原発事故により甚大な被害を受け、2022年8月の一部避難指示解除によりようやく人が住めるようになった町です。
双葉町伊澤史朗町長は、町を元に戻すのではなく「新しい町をつくりあげる」と語られていました。

少しずつ復興の息吹が芽生え始めた双葉町に、フレックスジャパンは『ひなた工房 双葉』を開設しました。
ひなた工房では大切な思い出の詰まった衣料品が、バッグや小物などに生まれ変わります。

東日本大震災からの再生の象徴と呼ばれる双葉町での、衣料品の再生事業です。
双葉町とひなた工房、共通しているのは「生まれ変わる」「再生する」ことです。

そこで我々は「町の再生」「思い出の再生」を重ね、『生まれ変わる』をテーマにしたショートストーリーを募集しました。
生まれ変わることによって一歩を踏み出し、ひなたの道を気持ちよく歩きたくなる様な、あたたかい作品が集いました。

2023年4月5日　双葉町産業交流センター屋上より撮影した双葉町の様子

可愛がって下さい

田原にか

可愛がって下さい

私は公園の入り口に置かれた段ボールに近づいた。中にはタオルとペットボトルが置かれている。箱の中に手を伸ばすと、右手の甲に訴えかけるようにゴロゴロと甘えてきた。ペットボトルが。

ペットボトルが生きている？

私は無責任にペットを捨ててしまう人が本当に嫌いだ。それが例えペットボトルだとしても。

部屋に帰ってソファへ座ると、ペットボトルはひざの上に乗っかってきてコロコロとじゃれてきた。太ももにひんやりとペットボトルの冷たさが伝わってくる。

名前はペポとつけた。ペポはボタニカル柄のフレアスカートが大好きで、スカートの裾をペットボトルの蓋で挟んで引っ張るのが日課だった。休日はペポと遊ぶ事に費やした結果、気が付けば友達と遊ぶ機会も激減していた。そんな私の三十歳の誕生日に母から電話がきた。

「どうせまだ彼氏もいないんでしょ。明日部屋行くからね」

母親は次の日にやってきた。ありがたい反面、いつまでも子ども扱いをされるのは嫌だ。不満をぶつけてしまいそうなので母を部屋に置いて一度外出する事にした。

「一時間くらいで帰るね」

ベッドの下に隠れて動かずに止まっているペポにこっそり告げた。

それがペポを見た最後になった。

母の好きなどら焼きを買って帰宅すると、部屋が綺麗に掃除されていた。ベッドの下にあった雑誌もゴミもペポも無くなっていた。私は大慌てで母を問い詰めた。

「資源ごみの日だし、缶とペットボトルは捨てたわよ」

買ってきたどら焼きを母親に投げつけてしまった。

私はゴミ捨て場まで走った。しかし既に何も残っていなかった。街中のゴミ収集車を探し回ったが見つからなかった

家に帰ると、母は既に帰っていた。〝ごめんね。どら焼き、美味しかったよ〟と書かれたメモと私への誕生日プレゼントが置いてあった。

それからは、道路に捨てられているペットボトルを拾い上げてはため息をつく日々が続いた。

ペポがいなくなってどれくらい経ったのだろうか。ある日、洋服屋で服を選んでいた。突然スカートを引っ張られた気がした。慌てて脱げないように押さえると、棚に置いてあるスカートが私のスカートの裾に絡みついていた。まるで私のスカートを引っ張るかのように。そのスカートが置いてある棚には【リサイクルポリエステルを使用】と書かれていた。

今日のスカートはボタニカル柄だ。

愛を紡ぐ細胞

蒼月友

夜って薄情だ。

永遠に続きそうなふりをして、いざとなったら光を生むことをためらわない。

世界の色が黒から青へと移ろっていく。目の前には懐かしい海が広がっていて、隣には彼女がいる。こうやって夜明け前の海を二人で眺めるのは、いつ振りのことだろうか。

「もうすぐ夜が明けるね」波音の合間に彼女が言った。「まだ帰らないの？」

ああ、と僕は頷いた。

「そうだね。でも、あと少しだけ話をしてよ」

「いいよ……あ、そういえば知ってる？　人間って、生きながら生まれ変わっているらしいよ」

「それは輪廻転生とか、そういう話？」

「ううん、細胞の話」

「細胞……」

「そう。人間の体って、幾兆もの細胞で作られているでしょう？　生きている間、その一つ一つが何度も生まれ変わっているんだって。それって、前に会った君と今ここにいる君は、ほとんど別人のような存在だ、ってことだよね」

「そうなんだ」

「うん、だからさ」

「だから？」

「だからもう、忘れたっていいんだよ、私のこと」

僕は息を詰め、彼女を見据える。薄闇に浮かび上がるその輪郭は、深海を彷徨う気泡みたいに儚げだった。

「もう、この海に来なくてもいい。どんなに探したって、きっと私は見つからない。君はただ、新しい自分のために生きていけばいいの」

返す言葉が、すぐには見つからなかった。

彼女が言うことは、ある意味では正しいのだろう。例えば今の僕には、彼女を失ったあの日の慟哭を完全に再現することはできない。やはり、あの頃とは違う生き物なのだ。

それなのに何故、今も彼女と共に生きていると感じてしまうのだろう。

人間が細胞の集合体だというのなら、それらを織りなしているのは特別な糸のようなものではないだろうか。とても強く、たおやかで、けっして色褪せない。そんな不変めいた素材で紡がれた糸によって、僕という人間の仕組み、そのものに縫いつけられた存在――それが彼女だと思った。

「僕は君を探しているわけではないよ。忘れられないわけでも、あえて思い出そうとしているわけでもない」

「なら、どうして？」と彼女はきいた。「どうして私は、ここにいるの？」

あのね、と僕は答える。

「きっと君はもう、僕の一部なんだよ。何度生まれ変わったって、それだけは変わらないんだ」

そっかぁ、と彼女は言った。

「だからこんなに、あたたかいんだね」

僕たちは微笑み合う。憂いなんて何もない。

水平線に溢れ始めた陽の光が、彼女の姿をゆるやかに漂白していく。どちらともなく繋がれた手のひらを、波しぶきを掴んだような感触が包み込む。

彼女がいる。僕はひとり目蓋を閉じる。

夜が明ける。

焦げ跡

彼方ひらく

「どうしてくれるんだ、親父の形見なんだぞ！」
物静かな父が母に対してそんな怒声を張り上げたのを、私は生まれて十七年間で初めて聞いた。母はアイロン台を前に、正座を崩して黙っていた。垂れた前髪で目元は見えなかったが、唇をきっと結んでいた。
アイロン台にかかったフレンチリネンの白シャツは、後ろ身頃にくっきりと焦げ跡がついている。私も縫製工場の跡取り娘だ。取り返しがつかないことは分かる。
「このシャツはな、親父が若い頃にパリで惚れ込んで、なけなしの財布を叩いて買ってきたんだ。二枚とないんだぞ！　それを……」
「そんなに大切ならアイロンくらい自分でかければいいじゃない！　いつまでも親父が親父がって！」
「……な、なんだと！」
「お父さん、だめ！」
私は必死に、身を乗り出す父にとりついた。
よりによって旅行の前夜に、なんでこんなことになったんだろう。
創業者にあたる祖父が早くに亡くなり、父と母は働き通しで、安い輸入品から従業員とその家族を守るのに精一杯だった。だから私は二十年ごしの、二人がかつて行けなかった新婚旅行を提案したのだ。軽井沢のペンションと新幹線を予約して、乗馬体験と、ジョン・レノンが行きつけだったカフェテラスのランチと、ニューアートミュージアムと、詰め込みの二泊三日のオリジナルツアー。古株の職人さんたちにも話を付けておいたのに。
父の去ったあと、薄暗い小さなダイニングで母にハーブティーを淹れた。母はテーブルで柱時計を見ていた。壊れて鳩が出なくなってから何年も経つ。
「お父さんさぁ、あんなに怒らなくてもいいのにね……。でも、お母さんもおじいちゃんのこと言っちゃだめだよ。あれ絶対怒るやつじゃん」
父は祖父を尊敬しているのだ。
「わざとなの」
「え？」

「シャツ、だめにしてやろうと思って」
「……え、え？　なんで？」
母は頬杖の手を外して、カップを横に押しのけ、テーブルに突っ伏してしまった。
「あんたには分かんないのよ」
「なにそれ！」
翌朝、ベッドから出たくなかった。旅行は中止だろう。今日は可燃ゴミの日だから、シャツを捨てる捨てないで、きっと揉める。分かってる。私は無力だ。枕を壁に投げて部屋を出ると、父が玄関で靴を磨いていた。横には革のボストンバッグ、その上に古い野球帽。
父は初めて見る柄の茶色いシャツを着ていた。最初は分からなかった。何回、何十回アイロンを押し当てたらあんなになるのか。襟ぐりから裾まで無数にアイロンの焦げ跡が重なっている。あのシャツだった。母のつけた焦げ跡はもう分からなかった。
「ごめんなさい」
気づくと、隣に母が立っていた。母の眼がみるみる潤んで、涙が溢れた。
「ごめんなさい、あなた。私、私……」
「いいんだ」
父がさえぎった。母は嗚咽する。
「支度できるまで待ってるよ」
「お、お父さん、本当にその服で行くの？」
父は顔を上げて笑った。
「俺には俺の生き方があったんだ」

Reincarnation

流灯祭

振袖を手に美容室に入っていく娘の香奈は、妻にそっくりだと啓介は思った。できることなら、一目見させてやりたかった。

妻と交際するきっかけになったのが、一枚のひざ掛けだ。気遣いの妻は冷房の効く社屋の中で、華奢な体を摩っていた。それが目に余り、啓介が営業先を二倍速で回って、近くの衣料品店で買った。どこにでもある、安っぽい白地に橙色の花柄の物だった。それでも妻はひどく喜んでくれた。

同棲を始めた狭い二間、命の誕生を告げられた診察室、生まれた香奈と妻の布団の上、震災後の仮設住宅、ほどなく闘病中の病室。妻とひざ掛けは共にあった。

妻の死後、啓介は車の助手席にひざ掛けを置いた。そうすると妻がすぐ隣にいてくれるような気がしたからだ。幼い香奈を男手一つで育てるのに不安な時、仕事がうまくいかず転職を繰り返していた時、全てを投げ出したくなった時、ひざ掛けに手を触れると、妻を感じて踏み止まれた。香奈も悩み事があると助手席で泣いた。

しかし、香奈が中学二年の秋にひざ掛けが破れてしまった。男親にはわからない女子のもめごとを理解してやれなかった。啓介は無力で、妻が娘の辛苦を全身で受け止めてくれたのだと思った。

「気にするな、物はいつかダメになるもんだ」

それ以来、香奈は助手席に座らなくなった。罪悪感を覚えたのかもしれなかった。そう感じさせまいと啓介はひざ掛けを押し入れ深くにしまった。自分への戒めでもあった。いつまでも妻に甘えていてはいけない。自分がしっかりするんだと。

高校大学と香奈は健やかに成長し、双葉町で今日成人式を迎える。

振袖姿の香奈が美容室から出てきた。

香奈は後部座席ではなく、助手席に座った。手に何か乗っている。それは花柄の服を着た熊の縫いぐるみだった。服の素材を見て、恵介は言葉を失った。妻のひざ掛けだった。

「それ幸子のじゃないか」

「ごめんね、お父さん。あの時破っちゃって」

「香奈のせいじゃない。それにこれは？」

「リメイクしたの。これは今日までの感謝の気持ち。お母さんをしまい込まないで、お父さんのそばに置いてあげて」

啓介のひざに縫いぐるみが乗せられた。

妻は娘の成長をこの日まで見守ってくれていたのだ。香奈の思いやりを形にしてくれた。

悲しみではなく感謝がこみ上げてくる。

もう少しだけ、そばにいてくれるか、幸子。

「よし、行くか」

滲む視界の中、家族三人を乗せた車はゆっくりと進み始めた。

逆メタモルフォーゼ

辻内みさと

私の手元には七色七本のマフラータオルがある。

マフラータオルというのは首に巻きやすい細長いタオルで、ライブのグッズでよく見かける。このタオルも例に漏れず、十代の女子七人組アイドルグループ『虹セブン』の卒業ライブツアー記念グッズだ。

私はつい先日まで、『虹セブン』の黄色担当〝みくるん〟だった。

『虹セブン』はイベントやライブをやればそこそこ動員出来る人気はあったものの、テレビに取り上げられるほどの知名度はなく、三年の活動期間を経て事務所からあっさり首を切られた。解散を告げられた際、まあ仕方ないよね、とメンバー同士で苦笑いしたのを覚えている。

結成当初こそ「武道館行くぞ！」と勇ましく情熱を燃やしていた私達だが、ステージをこなすたびに現実が見えてきたし、レッスンとライブ漬けの日々は全く自由が無く、正直苦痛だったのだ。

三年生に進級するタイミングで普通の女子高生に戻った私は、大学受験に備え猛勉強を始めた。

アイドルをやって痛感したのだが、世の男達――特に大人の男性は、女の子のことを「自分より頭の悪い存在」として扱う。ちやほやするのは、言うことを聞かせられると舐めているから。女の子であるという理由だけで理不尽に踏みにじられたくない。だから大学に行って、賢さを得ようと思ったのだ。

とは言っても、希望する大学は正直今のままだと厳しい。浪人してもいいよ、と両親は励ましてくれるが、一人娘のやりたいことを全て応援してくれる優しい両親だからこそ、甘えてばかりはいられない。

勉強に没頭できるよう、手間ひまかかるヘアアレンジとメイクをやめた。すっかり地味になった私を、親友は「逆メタモルフォーゼじゃん」と聞き慣れない言葉で評した。要は蝶が幼虫に戻ったということを言いたかったらしい。ムッとしないでもないが、これは言い得て妙ってやつだ。青虫が葉を貪るように、英単語と数学の公式を覚えまくろう。

ある日家に帰ると、母がリビングでミシンを唸らせていた。縫われているものを見て私は目を丸くする。家使いにでもしてよ、と母に預けた七色のタオル。それがなぜか長方形に繋ぎ合わされ、『虹セブンFOREVER！』のライブロゴが輝く、虹色の旗へとメタモルフォーゼしていたのだ。

「〝みくるん〟なら出来る！　受験頑張れ！」

帰宅した父と共に、母は縫い上がった旗を颯爽と振って見せた。アイドル時代もライブに来て、黄色のライトを振ってくれた両親。私はちょっと涙ぐみそうになったのを笑って誤魔化し、〝みくるん〟の時のようにガッツポーズで答えた。

幼虫に戻ったということは、新たな蛹になれるチャンスを得たということ。次の春には大学生として舞い上がるために、私は勉強机の前に虹色の旗を掲げた。

父のサムシングブルー

寿すばる

母に呼ばれたのは、茶の間でウエディングドレスのカタログを眺めている時だった。

「そろそろ処分しようと思っているんだけど、捨てるのもったいなくて。何かに使う?」

母が開けたタンスには営業マンだった父のスーツ。クリーニングの匂いがして、毎朝スーツ姿でコーヒーを飲んでいた父を思い出した。母が毎日アイロンをかけていた白いワイシャツたちも、引出しの中で二度と来ない父を待っていた。

「んー、適当にリメイクしようかな」

密かなひらめきが浮かんで、私はスーツとワイシャツを部屋に持ち帰った。

服飾の学校を出たくせに、まったく無縁の仕事を転々としていた私。父も母も口には出さないながら心配していたのは薄々知っていた。ごめんね、こんな娘で。結婚が決まったときの母は見たことのない顔で喜んで、その反応を見てやっと親孝行できたんだと気づいた。父は既に旅立ったあとだったから、生きていたらどんな顔しただろうと、嬉しいのと申し訳ないのとで複雑な気持ちにもなった。

白いワイシャツを何枚も広げてウエディングドレスのデザインを考える。うん、裾のカーブを生かしながらアシンメトリーに重ねたプリンセスラインが良さそう。襟は芯があるからビスチェに、デコルテ周りにも映えるかも。ああ、服飾勉強していて良かった。もう一度、親孝行ができそうだ。

一枚だけ新品同様の青いワイシャツがあった。襟の形がレトロで、父が若い頃のものだと思った。幸いガーデンウエディングなので純白でなくても良い。古いのに捨てずにとってあるのには理由があると思い、大きくバラに見立てて腰にあしらう。サムシングオールドに加えて、ちょうどいいサムシングブルーだ。

サマーウールのスーツは二着使ってグレーのドレスに生まれ変わった。どちらのドレスも生地を大きく使っているから、式が終わったらまたリメイクできる。父とはもう会えないけれど、父の服は何度でも生まれ変わる。インテリアや子供の服になって、その度に新しい思い出が織り重なってゆくのだろう。

母に分からないようにこっそり制作して数ヶ月。とうとうお披露目の日。母がウエディングドレス姿を見たいというのを、お楽しみに、とだけ言って、直前まで隠しておいたから着替えが少し慌ただしかった。

介添さんから「お母様びっくりなさいますね」「本当にお似合いです」と、素敵な言葉をたくさんかけてもらった気がするけれど、なんだか音がすうと遠ざかっていった。私の心臓の音だけが世界に鳴っていて、介添さんが鉄製のガーデンゲートを開いたとき、いいね、と父の声がした。たぶん、キイと軋んだゲートの音だったと思うけれど。

「作ると思ってた。ありがとう、すごく素敵」

どうやら母の掌の上だったようだ。

「その青いシャツ、結婚前に母さんがあげたの。でもサイズが小さくて。ねぇお父さん、やっと着れたわね」

父の笑い声が聞こえた。

ゲートは静かに口を閉じていた。

母と腕を組み、ヴァージンロードを一歩踏み出す。今、私は確かに父と歩いている。未来へと。

掌に我が子

千葉紫月

駅を降りると、急な夕立に出くわす
バス停は大行列。小遣いをやりくりしている身としては、簡単にタクシーは乗れない。
「仕方ない、走るか」
カバンを傘にして家まで走る。

「ただいま」
「おかえり。随分濡れちゃったね。傘持っていかなかったの？」
びしょ濡れになった姿を見て、妻の葵が呆れたように言った。
「雨降るなんて天気予報で言ってなかったからさ」
「だから、いつも折りたたみ傘持ちなさいって言っているのに。直ぐにお風呂入る？」
「そうするよ。湊は？」
「今起きたところ。ついでにお風呂入れちゃってくれない？」
「了解」
湊はこの春生まれた、初めての息子だ。
ベッドを覗くと夢中になってメリーで遊ぶ湊の姿が見えた。
「ただいま、元気だったか？」
顔を近づけるとキャイキャイと楽しそうに笑う。
「もっと育休取れば良かったな」
産後二ヶ月は育休を取得した。仕事の関係、金銭面など考慮すると、そのくらいが限界かなと思って取得したが、今思えば無理してでも、もっと育休を取れば良かったと後悔している。
「早くお風呂入らないと風邪引くわよ」
葵に言われ、急いでスーツを脱ぎ、湊の服も脱がせる。
湊の服を脱がせると太腿に赤い跡が残っていた。
「もう六十センチの服じゃ小さいかもな」
「えー、こないだ買ったばかりなのになあ。しょうがない、七十センチの服を出しとくからお風呂出たら、それ着せてあげて」
「小さくなった服はどうするの？」
「もったいないけど、処分するしかないね」
この空色のロンパースは自分が初めて湊に着せた

服だったので、少し残念だった。
「鞄も濡れていたから、干しといたよ」
お風呂から上がると広げた新聞紙の上に鞄が干されていた。
「ありがとう。中身まで濡れていた？」
「そこまでじゃないけど、これはもうダメだね」
通勤の友であった文庫本は見るも無惨な姿になっていた。
「明日からは折りたたみ傘持っていくよ」
「そうした方がいいね」

翌日は昨晩の雨が嘘のように快晴だった。
「行ってきます」
「ちょっと待って」
玄関口で葵に呼び止められる。
「これ持っていって」
葵の手には見覚えのある色のブックカバーが握られていた。
「もしかして、湊の服か？」
「上手く出来ているでしょ？」
「器用なもんだなあ」
素直に感心してそう言った。
得意気な顔をした葵に送り出してもらい駅に向かう。
電車に乗り早速ブックカバーをつける。
本を手に取ると、まるで湊を抱いているような気がして心がとても温かくなった。

太陽

立花伊織

あの日から随分と時間が経った。
私には当時、付き合っている彼がいた。
まだお互い学生だった私達は、これからずっと一緒にいるのだと信じて疑わなかった。

悲しみを感じる暇もなく、怒涛のように事が過ぎ去り、実際に泣いたのは随分後になってからだった。
私は少し前に、ずっと処分する事が出来なかったあるものを処分した。

膨らんだ状態の小さなビーチボール。
海に遊びに行った際、手際も準備も悪かった彼が、しぶしぶ現地で買って膨らましたものだ。
遊ぶ道具は彼の担当だったのだが、彼はすっかり忘れてきてしまった。
結局買ったものを使って、一日中遊んだ。

膨らましたボールを潰すのも勿体なく感じて、そのまま持って帰ったのだ。
私はそれを押し入れにいれて、すっかり忘れてしまっていた。

そんなひと夏の思い出が詰まったボールはあの日の後も、押し入れで縮こまって、存在していた。
その小さな過去を見つけてしまったのは、帰宅が許可されてから、少し経った後だった。

引越しを既に済ませていた私達は置いてきてしまった物をある程度引取りにくる事になった。

かつての自室に飾られた写真立ての中で永遠に笑顔を浮かべている私と彼は、凄く幸せそうで胸が苦しくなる。

無理やりにでも切り替え、押し入れを開ける。
アルバムや布団、沢山のものが入った中で、一際目を引くものがある。
なんだろうと思って、手に取って見ると例のビーチボールが少しだけしぼんでそこにあった。艶やかな光沢を感じさせるそれには、彼が生きていた時の

呼吸が、息が、しまい込まれていた。
あ。
だめだこれは。
そう思いつつ、持って帰る物用の袋の中に、私はこっそりビーチボールとアルバムをいれたのだった。
引越し先に戻って、その袋ごと戸棚にしまう。

それからあのボールは、生活の一部になった。
ボールは見なくても確かにその戸棚の中にしまわれていた。

それからしばらく経って、私はボールを戸棚から出した。さらに少し、しぼんでしまってはいたものの、ボールはまだその光沢を失ってはいなかった。
私は震える手で、空気の入り口の栓を、そっと開けた。
途端に彼が、彼の吐息が、少しづつボールから抜けていく。
私はそっと力を込めてボールを潰した。
彼がどんどん抜けていく気がしたが、不思議と喪失感は無く、どこか安堵さえあった。彼をようやく、私のエゴから解放できる。

来年、私は結婚する。
彼とは似ても似つかない無愛想な優しい人と。
でもきっと、私の太陽として、彼は心に残り続けるのだ。

太陽の粒

相川朱里

朝起きたら、目元が腫れていた。まだまだ寒さの残る三月の初め。ひなたは氷のように冷たい水で顔を洗った。

昨日三年間付き合っていた彼氏に振られた。他に彼女がいたらしい。二股をかけられていたのだ。昨日はさすがにショックだったが、一晩寝て起きてみると意外に落ち着いていた。今日は日曜なので会社はない。

まず連絡先を、次にスマホに入っている写真を容赦なく消していく。あらかたデータ上にある彼の痕跡を消し終えると、部屋に目を向けた。三年間も付き合っていると彼からもらったプレゼントもそこそこ溜まってくる。お揃いのキーホルダー、バッグ、洋服などなど。この先も使えそうな物以外は捨てるのと、売るのとで分けていく。このバッグなんてそこそこ高く売れそうだ。

昨日までは全部思い入れがあったけれど、今ではただの物。そう簡単に割り切れる自分に、ひなた自身が驚いていた。もう少し引きずるかと思っていたけど、そんなもんだったと言うことだ。

順調に片付けていたひなただったが、洗面所を片付け始めて手が止まった。引き出しからネックレスや指輪がじゃらじゃら出てくる。ひなたはその中の一つを鏡に映した。

彼からもらったネックレスだった。ひなたの名前に合うような黄色に反射するシトリンが揺れてる。もちろん身につける気にはなれないが、なぜかこれだけは捨てる気にも売る気にもなれない。このネックレスにそんなに思い入れがあるとは思えなかったが、わからないものだ。とりあえず保留ということにして、先に他の片付けを済ませてしまうことにした。

ひと通り片付けが済み、ネックレスを手に持ち、ベッドに腰を下ろした。多くのものを捨てたり、売ったりしたので、いつもより部屋が広く感じる。視線を少し上にずらすと、可愛らしいお人形と目があった。ひなたが小学生の頃から大事にしているリカちゃん人形だ。今でもたまに、髪をとかして、服を

着せ替えてあげている。

ふと思いつき、ネックレスをリカちゃんの髪に当ててみた。リカちゃんの茶髪にシトリンがよく映えている。ひなたはネックレスのチェーンを切って、シトリンをピンに接着した。少し雑だが人形の髪飾りにしては十分であろう。

完成した髪飾りをリカちゃんにつけてあげる。うん、いい感じだ。行き所のなかったネックレスが思わぬところに落ち着いた。ネックレスの形のままで置いておくと、彼にまだ未練があるようで嫌だったが、形が変わったことでそんな気も全然しない。

申し訳ないけれど、昔の恋はリカちゃんに背負ってもらって、自分は新たな恋に進まなければ。シトリンがリカちゃんの髪の上で、まるでひなたを照らす太陽のように輝いた。

散歩

春野息吹

玄関に掛かった赤いリード。少しくすんだ布地に、白と薄ピンクの花の刺繍。ぶらりと揺れた長い紐が、「連れてってくれないの？」と問いかけているようで、深く息を吐いた。

大好きな妹が天国に行ってしまったのは、一ヶ月前のことだ。妹といっても血のつながりはない。彼女は赤いリードの持ち主であり、犬だから。

でも、一人っ子だった私にとって、小学生の頃から一緒に育った彼女はまさに妹だ。そんな彼女のいない日々に、まだ慣れないでいる。

三月頭にしては暖かく、ほころび始めた梅に、春の兆しを感じる日だった。歳をとった彼女は、冬の寒さが堪えるようで、病院の回数も随分と増えていた。やっと訪れた春の気配が心地よかったのか、窓辺で昼寝をしていた。

そうして、そのまま、逝ってしまった。

たんぽぽの綿毛のような毛は、撫でるとふわりと柔らかく、小さな身体は温い。なのに、感情豊かな尻尾は、いつまでも静かなままだった。

想像以上に別れは静かで呆気なかった。

天国でも退屈しないよう、思い出の品を手に取り、棺に入れる。その時でさえ、まるで夢の中にいるようで、どこか現実味がなかった。

何度も投げて遊んだ、ペコペコ音の鳴る骨のおもちゃ。なぜかお気に入りの、私のお古の靴下。いつもくるまっていた、ピンクの毛布——

宝箱にしまうように、一つ一つ、優しく触れた。

最後に赤いリードの番になり、手が止まった。

指先で刺繍の模様をなぞると、毎日の散歩の記憶が目に浮かぶ。神社まで走ったこと。舌を出して息をする彼女を笑ったこと。川から魚を見たこと。近所の人に、「元気だね」とよく言われたこと。散歩好きでお転婆の彼女との思い出が、たくさん詰まっていた。どうしても、手放せなかった。

それから一ヶ月、見るたびに胸が苦しくなる。でも、涙は出なかった——

数日が経ち、春休みも終わりかけの頃、唐突に母

が言った。

「ねぇ、散歩に行こう」

「んー。いいや」

特に予定はなかったが、顔も見ずになんとなく愛想のない返事をしてしまった。ここ数日、特にこもりがちになっていた。

「じゃあ、連れてってあげて」

久しぶりに聞く言葉に、はっと顔を上げる。

母が差し出したのは、赤いリード——？

手のひらに収まるほど短くなっていたが、白とピンクの刺繍は、やはり間違いなく彼女のリードだった。長かった紐の部分が無くなり、持ち手部分だけのような輪の端には金具がついている。キーホルダーみたいだ。

「あの子と一緒に、行ってあげて」

そっと受け取り、握りしめると、指にでこぼことした花の模様を感じる。

目が、頬が、熱い。涙が溢れてきた。止まらなかった。懐かしい感触が愛おしくて、名前を呼ぶ。彼女がそばにいてくれるような気がした。

少し落ち着いてから、母と一緒に散歩に出た。彼女といつも歩いた川沿いの散歩道は、いつの間にか桜が咲き、白い絨毯のようだった。

優しい春の光に包まれて、積もっていた雪がようやく溶けたらしい。

「春になったんだね」

ダディベア

望月滋斗

物心ついた頃にはすでに、パパはクマのぬいぐるみだった。

ある日、パパは道路に飛び出した幼い私をかばって車にぶつかった。そのはずみで口から抜けた魂が、そのとき私が片身離さず抱いていたクマのぬいぐるみへ乗り移ったのだという。

「あのときパパは魂を売ったんだ。悪魔じゃなくて、クマにな」

パパは酔っ払うたびにフワフワの手を広げながら、当時のことを自慢げに話す。

しつこい。パパがヒーローなのはもう分かったってば。

昔のパパは抱きしめるとバラの香りがして、見た目もスリムだった。それが今ではすれ違うだけで加齢臭がして、中の綿がずり落ちてきたのか、下っ腹も出ていてだらしない。自分で自分を「ダディベア」だなんてお洒落に呼んでいるみたいだけど、娘の私に言わせてみれば「ジジィベア」だ。

そんなこんなで、私は高校に上がった今でも反抗期を終えられずにいる。

思えば、さっきからまたケンカが始まったばかり。

彼氏がUFOキャッチャーで獲ってくれたウサギのぬいぐるみをリビングに置いておいたら、パパは可愛いその子を敵視してか、勝手に捨てたのだ。今朝、それに気づいた私はカンカンになり、もうろくに口をきかないと決めた。

「許してくれよぉ。ほら、昔はハグで仲直りが約束だったろぉ？」

「ハグなんて臭くて無理」

「反抗期かぁ。これも悪魔が与えた、いや、クマが与えた父親としての試練かぁ」

ああ、いちいちムカつく！　きっとこれが嫌でママは出ていったに違いない。

私もまた家を出ていった。まだゴミ捨て場にいるかもしれない可愛いウサギを助け出すために。可愛くないクマから逃げ出すために。

道路の向かいにあるゴミ捨て場には、まだゴミ袋が山積みのままだった。

「まだ間に合う！」

一目散に道路を渡りかけた、そのときだった。真横からクラクションの音。見ると、すぐそこにトラックが迫ってきていた。

あ、死ぬ。そう悟った瞬間、私は柔らかい感触に背中を強く押されて前に転んだ。

直後、バンと鈍い衝撃音がして振り返ると、そこには停止したトラックの前に横たわるパパの姿があった。

「……今朝はすまなかった。これでおあいこでどうだ。しかし道路へ飛び出すなんて、お前はまだまだ赤子の頃と変わらないなぁ」

「パパ、綿が、綿が飛び出てる」

「……愛してるぞ」

やがて、パパの黒いビーズの瞳に光がなくなった。

私はパパの身体を揺さぶり、涙を流しながら気づく。パパをあんなに憎めていたのは、ずっと一緒にいられるって、どこか安心しきっていたからだったんだ……。

しかし、しばらくそこに座り込んでいると、ガサゴソ。

私は物音のする方――ゴミ捨て場を振り返り、目を見張った。なんと、捨てられたウサギのぬいぐるみが、こちらへ駆け寄ってきていたのだ。

「まさか、パパ？」

「ああ。身体もちょうど替え時だったからよかったよ」

加齢臭なんかより、もっとキツい生ゴミの臭いがする。けれど、私はパパを抱きしめて離すことができなかった。

波に揺られて、

吉田六

パパの声を久しぶりに聴いたのは連日の雨があがり、真っ青という言葉がよく似合う夏空の日のことだった。風が穏やかにながれ、蝉の声がかえって静けさを際立たせるような、そんなやわらかい夏の日。パパが波に連れていかれたのもこんな日だったっけ。

パパとの思い出はいつも海の匂いがする。あの日もそうだった。わたしは買ってもらったばかりの水着が嬉しくて、帰りたくないと言って両親を困らせていた。あの時、わたしがもっといい子だったら、もっと早く帰路についていたら、パパはどこかの知らない子のために海に入らなかったのかな。

あの日からもうずいぶん経った。わたしもママもパパを忘れたことはないけれど、それなりに前を向いて生きられるようになっていた。パパが助けたあの子もすっかり大人になって、最近家庭を持ったらしい。そのことに本心から「良かったね」と言える自分がいることに安心したのを覚えている。同時に、このまま前ばかり向いて生きていたら、いつか本当にパパのことを忘れてしまう気がして少し怖くなった。さざ波に逆らって歩いていたら、いつか気にも留めなくなるように。

そんなある日のことだった。おばあちゃんから見せたいものがあると電話があった。パパのおばあちゃん。パパがいなくなった後もわたしたちのことを気にかけてくれる、本当に優しい人だった。パパの実家を訪れるのは数年ぶりだった。丘の上の、窓から海が見える家。おばあちゃんはこの家でどんな気持ちで生きてきたのだろう。息子を奪った海と否が応でも顔を合わせなければならないこの家で。

会話もそこそこにおばあちゃんが持ってきたのはビデオカメラだった。パパのビデオカメラ。

「昔、三人でうちに来た時に忘れていったのね。この前片付けしたら出てきたわ」

おばあちゃんはそう言って録画の再生ボタンを押した。

パパの声だった。ああ、そうだ。こんな声だった。顔には写真で会えた。匂いは海が教えてくれた。でも、この声と会うのはあの日以来だった。気づけばわたしもママも泣いていた。声をあげて泣いていた。

そんなわたしたちを優しく見つめながらおばあちゃんは、

「もしね、生まれかわりというものがあるなら、あの子はとっくに次の人生を楽しんでいると思うの。だからね、あなたたちにも今を生きてほしいわ。でも、でもね、もしも過去に逃げたいときは逃げていいのよ。そのときは一緒に泣きましょう？」

そう言って微笑んでいた。ああ、そうか。おばあちゃんはしっかり過去と生きてきたんだ。この家で、海の見えるこの家で。

次の日、わたしたちは三人で海へ行った。その日も波は穏やかに、やさしく揺れていた。

母の形見

結城刹那

息子が中学生になったタイミングで、俺たち家族は福島県に引っ越した。

東日本大震災から約十年が経ち、街は以前の面影を取り戻しつつあった。

震災によって、人々は全てを失ってしまった。それは俺自身も例外ではない。

俺は福島県で生まれ育った。父は俺が一歳の時に事故で亡くなり、それからは母が女手一つで育ててくれた。貧相な暮らしを余儀なくされたが、決して不幸なものではなかった。

母は手芸が得意で、俺の手提げ袋やシューズ入れ、洋服などをよく作ってくれた。俺はそれらを傷つけないように大切に使っていた。

母が愛情をもって育ててくれたおかげで、俺は無事に社会人となり、愛する妻と結婚することができた。妻が妊娠した際、母は「孫に衣装を作ってあげるんだ」と意気込んでいた。

だが、その願いが叶うことはなかった。東日本大震災による津波の影響で、実家は海に飲み込まれ、母は行方不明になってしまったのだ。当時、俺は出張で愛知県にいた。母の訃報を聞いた時は、仕事に身が入らないほど、生きる気力を失っていた。

幸いと言って良いのかは分からないが、出張先に持ってきていた母のお手製の洋服だけは失わずに済んだ。それを『母の形見』として大事に扱っていた。しかし、高校時代から着ていて、約十五年もの時が経っていたので、糸が解れ、所々に穴が空き、着るのが拒まれるほどボロボロになってしまっていた。

「ねえ、父さん。どう？　似合うかな？」

息子は届いた洋服を着ると俺に感想を求めてきた。オーダーメイドの洋服を着る息子の姿を見て、何だか懐かしい気持ちを抱いた。その姿は、彼が『自分の息子』であると心から思えるようなものだった。

「すごく似合ってるよ。さすがは俺の息子だ」

青と白のストライプ柄の生地で作られた襟と袖口が白のシャツ。かつて俺が着ていたものが縮小化され、所々にアレンジが施されていた。

『母の形見』だった洋服はリメイクされ、俺の息子の元へと届けられた。

念願だった「孫に衣装を作る」ことは形見をリメイクすることで叶えてやることができた。天国にいる母もきっと喜んでくれていることだろう。

俺はリメイクシャツを着た息子と一緒に家族写真を撮ることにした。写真は現像し、仏壇に飾られた俺と母の写った写真の横へと飾った。その写真にはリメイクされる前の洋服を着た俺の姿が写っている。

俺たちの想いはこうして受け継がれていくのだ。

虎の支え

明日香

誰もいないワンルームに「ただいま」と声を掛ける。

＊

今年の春から東京の会社に勤めることになり、荷造りの為に一軒家である実家の箪笥を整理していると引き出しの奥から高校のクラスTシャツ、通称「クラT」が出てきた。

高校最後の年、体育祭で着用したそれは仲間との絆を悲しいくらいに思い出させた。

クラスカラーの黄色にメッシュ生地の表側にはリアルな虎の顔が描かれ、大口を開けた舌の上には〝3―1〟と刻まれている。裏側にはクラスメイトの名前が彫られ、捨てるに捨てづらい。

当時の私にとって「団結」を意味するそれは勇気を与えてくれるものだったが、卒業と同時に同級生とは疎遠になった。仲の良い友達とは連絡を取り合っていたが、進路の違いが水面下で些細なズレを起こし、今では大学時代の仲間と連絡を取る頻度の方が高い。

溜め息を零していると、母が昼食だと呼びに来た。

「それ高校のよね。捨てるの？」

「うん」

社会人にもなってコレを着るのは抵抗があるし一人暮らしの準備中だ。この機会に捨てるつもりだと説明すると、母は何か考え込む素振りをしたかと思うと顔を上げて言った。

「なら頂戴」

「何で？」

母は答えず、何処か楽しそうに「クラT」を持って自室へ引っ込んでしまった。

昼食を食べ終え荷造りもそろそろ終了だという頃、母が「じゃーん！」と自慢げに手渡してきたのは四角いクッションだった。が、思わず目を見張った。生地が、あの「クラT」だったからだ。虎の顔の中心に綿が詰められ、ぷっくりとした顔は威厳の欠片もない。

体の半分くらいあるそれを抱えて、問う。

「これは？」

「大事なものでしょ」

ドキリとした。

「これからあなたは一人で知らない土地で暮らさなきゃいけない。必ずしも誰かが助けてくれるとは限らない」

その言葉に言いようのない寂しさが込み上げる。母が続けた。

「でも思い出はそこに在る」

ハッとした。

周囲や私自身が変わっても、あの頃の思い出は変わらない。

全てが煌びやかだった訳じゃない。

それでも。

「こんなに沢山の人の支えがあって今があること、どうか忘れないでね」

母が虎の裏側、同級生の名前を丁寧になぞりながら言った。

＊

仕事でミスして気落ちしていても「いってきます」と「ただいま」を欠かしたことは無い。誰もいないアパートの部屋でも笑顔でいられるのは、この虎のお陰だ。

団結の象徴だった虎。今では同級生との思い出だけでなく家族の想いも零さず、背中を預けさせてくれる。

ひかり

猫戸寧

　そのつぶらな瞳を静かに目を閉じて、静かに温もりをなくし、それからもう寄り添ってくれることのなくなった小さな体を思う。愛犬の名前はひかりだった。

　そんなしんみりした風味の話をしたのに、傍であなたはくすりと笑った。それから、

「いいな、ひかり。会いたかったな。かわいかっただろうな」

　って、一緒にひかりの写真を愛でてくれた。薄い液晶の画面越しに、ほんのり茶みがかった白い毛をなぞる。胸の奥がくすぐったいような、熱を帯びるような。

　きっと私があなたに伝えたかったのは、ひかりを失った悲しみじゃなかった。

　私自身でも気づかなかったようなことを悟って、あなたは今、ひかりの温もりを手繰り寄せている。

　私がまだ幼かった頃、同じく小さな体のひかりに飛びつかれてはぐらついた。服を噛んで引っ張るようにして餌を強請られた。冬の寒い日に散歩へ行ったら、ひかりだけがあたたかくて、何だかその時だけ彼女が頼もしく見えて、身を寄せるのが幸せだった。親に叱られて悲しかったときだって、膝を抱える私にすんと寄せられたひかりの鼻先がくすぐったくて、すぐに涙が止まってしまった。

　愛しい子犬との日々、その柔らかい毛の感触を覚えている。そして失った今になって思い返す度、同時に二度と取り戻せないものだと強く感じてしまう。あの日々が幸せだったから、ひかりがかわいかったから。どうしようもない愛着を持て余しては、辛くなった。

　その話をすると、あなたはまるで共にひかりと過ごしてきたように愛しげな顔をする。

それを見た途端、今日までの私は悲しみに立ち直れないのではなく、ただ記憶の中のひかりが、ひかりがいた毎日が愛しくて泣いていたのだと、ようやく腑に落ちた。

　いつの日か、今度はあなたを失う日が来るのかもしれない。ふと思い浮かべては耐えられなくなる夜

がある。それでも今あなたが隣にいることで、考えうる限りのどんな未来もそこまで暗くはならない気がした。

初めてひかりを失った日の夜は、あんなに未来が心細かったのに。今はこうしてあなたが寄り添ってくれることが、何よりも心強かった。

　今、あなたと私の中に、ひかりがいる。また恋しくなったら、きっとあなたと二人で、一緒に泣いたり笑ったりするのだ。窓から射し込む陽がまだ暖かいのに、あなたはやけに頼もしく見えた。

　今日はこれから、あなたとどこへ行って、あなたと何を見よう。そう思い立ってまず声をかけたのは、私の方だった。

祖母の家

相原梨彩

祖母の家が嫌いだった。

祖母が嫌いなわけではなかった、ただあのボロくて時代遅れの家が嫌いだった。

エアコンのない家で風鈴の音と蝉の鳴き声が響く夏、こたつなんて意味をなさないくらい隙間風が吹く冬。

風情があるじゃない、なんてお母さんは言うけれど風情なんて現代っ子の私には知ったこっちゃない。風情よりも快適な暮らしの方が私にとってはよっぽど重要だった。

そんな私の考えを汲んでくれたのか祖母は私と会う時私の家に来てくれた。冷房の効いた涼しい部屋でアイスを食べたり床暖房で温まりながらテレビを見たりしていた。

けれどそんな日々も数年前に終わりを迎えた。祖母が寝たきりになったのだ。自宅での生活を希望した祖母は祖父や母の介護で何とか生活していた。その間、私は一度たりとも祖母の家に行かなかった。

もうここまで来ると祖母の家が嫌いだということよりも一度言ったことを撤回して祖母の家に行く事が嫌だったのだと思う。絶賛反抗期中だった私は母に余計なことを言われるのが嫌だった。

だから私は結局祖母が亡くなり遺品の整理をしなければならないという母に無理やり連れていかれるまで祖母の家には上がらなかった。

十年ぶりに祖母の家に上がると母にあなたは二階の掃除をして、と雑巾と掃除機を渡される。

脳が溶けてしまいそうなほど暑い夏だったその日は十年前と変わらず風鈴の音が鳴り響いていてうるさかった。

汗をだらだらと流しながら掃除を続ける。たまに出てくる小さい頃遊んだ記憶のあるおもちゃに一人で盛り上がりながら時間は過ぎていった。

もうほとんど作業を終えた時だった。目の前に見覚えのない、けれどどこかで見たことのあるような枕カバーを見つけた。

くすんだ水色の布をベースとした枕カバーはそれだけでは布が足りなかったのかいくつかの布を使い縫われていた。どう考えても素人が縫ったのであろう縫い目に祖母に裁縫の趣味はあったのだろうかと首を捻りながら枕に触れた時少し肌触りの悪い感触に記憶が蘇った。

「気づいた?」

いつの間にか後ろに立っていた母に声をかけられる。

「おばあちゃん、ずっとあんたが泊まりに来たらって何年も前から作ってたんだよ」

その枕カバーは昔の私が大好きだった洋服たちで出来ていた。サイズアウトしてしまった洋服たちは私の知らない間に生まれ変わっていた。

「あんたが泊まりに来たら驚かせるんだって縫ってたの」

そう寂しそうに笑う母と不器用な縫い目に目を奪われる。いつの間にかぼやけた視界の中で私は唇を噛み締めることしか出来なかった。

あの時の枕カバーはあの日持ち帰り十数年が経った今も使っている。あの時からつまらない意地を張るのをやめた。後悔のないようその場その場を一生懸命に生きることに決めた私は今それなりに幸せな生活を送れていると思う。

それも全て祖母のおかげだ。

「ありがとう」

枕カバーをそっと撫で呟き私は眠りについた。

向日葵と走る

昼川伊澄

制服をハンガーに掛けながら窓の外を眺めると、夏の到来を思わせる藍色の空がどこまでも広がっていた。新しい学校にはようやく慣れてきたし、ちゃんと友達もできた。でも、自分はこの子達より欠けているものがあると分かるときがある。そうなると、友人の輪でただ一人、何もかもが真新しい自分が浮き上がる。

「お風呂焚けましたよ〜！」

遠く階段下で私を呼ぶ声がする。大声を出すことに慣れていない、細くて揺れている祖母の声だ。「先に入って」口の中でそう言うと、声は徐々に聞こえなくなった。

『今日からおばあちゃんがお母さんだな。』引っ越してすぐ父がそう言った日、私は祖母が伸ばした手を振り払ってしまった。二人を押しのけて外へ飛び出して、足が縺れるまで夕日と反対側に走った。それから私は、祖母に生活を助けて貰うことが後ろめたい。

学校の荷物を片付けて、最後に定期券を鞄のポケットに仕舞っていると、底からハンカチが出てきた。それはあの朝渡されてそのままにしていたものだったと思う。痛いほど鮮やかな向日葵柄と、殴られたように目が合った。

「上がりましたよ。」

ノックと共に湯気を纏った祖母が部屋に入って来る。私は反射的にそれを手の中に隠した。

明日も学校だ。急がないとすぐに置いて行かれてしまう。私はもう、新しいなにもかもと共に生きていきたいのだ。

「じゃあ入ってくるね。」

目いっぱいに明るくそう返して部屋を出る。

すれ違いざまに、手の中のハンカチをゴミ箱に投げ入れた。

次の日の朝。制服に着替え髪を結ってから階段を下る。今日はどういうわけか、台所を動き回る影が見当たらない。何かあったのかと不安になりながら祖母の部屋を覗くと、そこには、机に突っ伏している薄い背中があった。

私の内側が少し青ざめる。

「……陽子おばあちゃん？」

すると祖母はゆっくりと起き上がって、目を擦りながら笑った。

「寝ちゃったのね、あたし。」

近くで聞く声は柔らかくて、胸がじんわりと温まった。

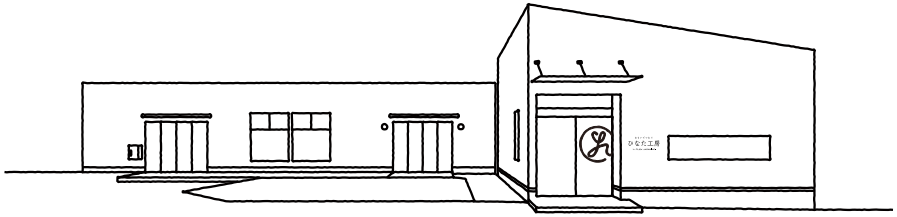
祖母は引き出しからパスケースを取り出した。外枠とストラップは遺品の箱の中にあった財布の合皮で、内側には昨日捨てたはずの向日葵柄のハンカチが合わせてある。

「大切なものはずっと大切なままで良いのよ、蒼葉ちゃん。」

堪らなくなって、私は祖母を抱きしめた。

あの日振り払った掌が頭に乗る。この体温が、やさしさが、悲しみに打ちひしがれて止まりそうになった私の手を引いてくれた。

鞄のパスケースが風になびく。私は、明日へ走り出す。



おもいでつむぐ
ひなた工房 双葉
by FLEX JAPAN INC.

フレックスジャパン（株）は福島県双葉町に
「ひなた工房 双葉」をオープンしました。
このアトリエでは、思い出の詰まったお洋服を
お預かりし、リメイクやリフォームを行っています。
テーマは「思い出の再生と創出」です。

ひなた工房

restitch.jp

WEBでも
公開中

本冊子に掲載中の作品
はこちらのサイトからも
ご覧いただけます。

restitch.jp/pages/
hinatabungakusho_results

ひなた短編文学賞 受賞作品集

関係者・協力（敬称略・五十音順）

主催 フレックスジャパン株式会社　共催 MFU THE MEN'S FASHION UNITY

協賛 岡学園トータルデザインアカデミー、ランドポート株式会社

後援 郡山女子大学、株式会社信州ケーブルテレビジョン、千曲市
ちくま未来新聞、一般社団法人ちくま未来戦略研究機構
双葉町、ファストフード店 ペンギン、株式会社LIFULL

協力 塚田浩司（小説家）、蜂賀三月（Web Novel Labo）

発行日 | 2023年11月29日

企画・編集 | ひなた短編文学賞運営委員会

発行 | フレックスジャパン株式会社
長野県千曲市大字屋代2451
026-261-3000
flexjapan.co.jp

おもいてつむぐ
ひなた工房 双葉
by FLEX JAPAN INC.